

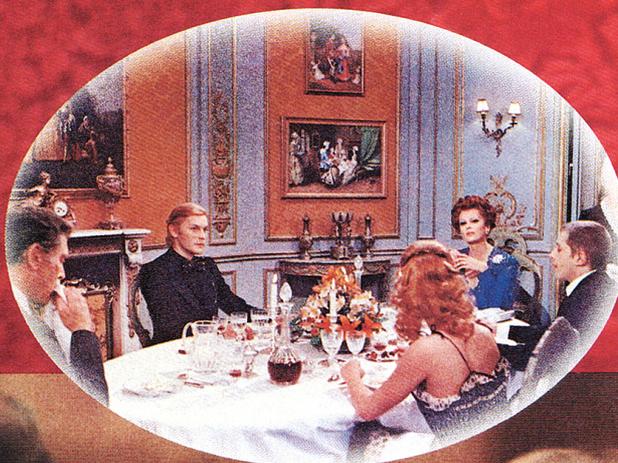


ヨーロッパ文明の終焉によせて詠いあげる巨匠ヴィスコンティ畢生のレクイエム
昭和53年度芸術祭参加作品

家族の肖像

CONVERSATION PIECE

バート・ランカスター
ヘルムート・バーガー
シルヴァーナ・マンガーノ
クラウディア・マルサーニ
ステファノ・パトリッツィ
特別出演
ドミニク・サンダ
クラウディア・カルディナーレ



監督ルキノ・ヴィスコンティ

脚本スーゾ・チェッキ・ダミーコ
エンリコ・メディオーリ
ルキノ・ヴィスコンティ

撮影バスカリーノ・デ・サンティス
音楽フランコ・マンニーノ

製作ジョヴァンニ・ベルトルッチ
伊仏合作ルスコーニ・フィルム/ゴモン・インターナショナル
テクニカラー・トッドAO作品(サントラ盤)セファンシズ
東宝東和+フランス映画社 共同配給



家族の肖像

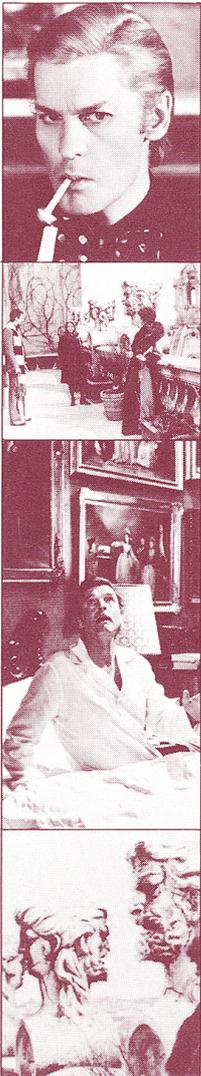
監督ルキノ・ヴィスコンティ
カラー作品(伊・仏合作)

昭和53年度芸術祭参加作品

東宝東和・フランス映画社 共同配給

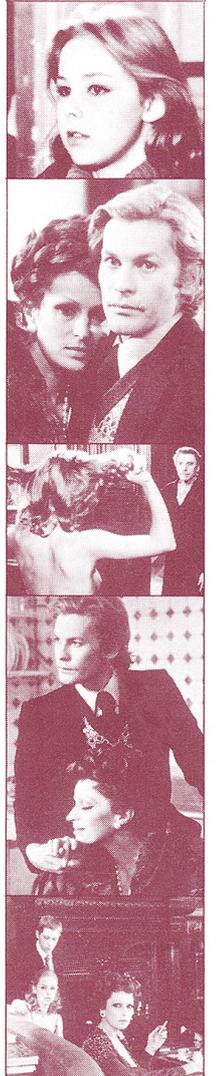


CONVERSATION PIECE



●解説「家族の肖像」は巨匠ルキノ・ヴィスコンティの自伝的色彩がもつとも濃いといわれる晩年の代表作である。アメリカで科学者だった主人公の教授が、近代文明の未来を危惧してローマの生家にひきこもり、静かな晩年を迎えようとするが、不思議な家族の一群の侵入によって死に至るという設定――。そこにヨーロッパ文明の滅亡の寓意と頹廢の地獄図を發見したヨーロッパの批評家たちは、この映画を巨匠の遺言、《ヴィスコンティ映画の集大成》として絶賛した。《ル・モンド》のジャン・ド・バロンセリは、教授はヴィスコンティその人の自画像とみているほどだ。

デカダンスの魅力を描きつづらに発散するヘルムート・バーガー(「地獄に墜ちた勇者ども」)、魔性の貴婦人役を堂々と演じきるシルヴァーナ・マンガノ(「ベニスに死す」)、15才の新人クラウディア・マルサーニの潑刺たるデビューぶり、編集助手出身のステファノ・パトリツィの生気みなぎる演技を、教授を演じるバート・ランカスター(「山猫」)が、孤独な心をつつと表現していふし銀のように味わい深い名演で支えきる。加えて特別出演のクラウディア・カルディナーレとドミニク・サンダの豪華な演技陣。スタッフも永年のヴィスコンティ作品の常連者ろいで、キャスト、スタッフとも、ヴィスコンティ一家の総結集の顔ぶれである。ヴィスコンティは、1976年3月17日心臓病で全世界から惜しまれつつ世を去った。



わが映画
わがレクイエム
ルキノ・ヴィスコンティ

私の作品にひんぱんにあらわれるのは、家族の物語であり、その自己破壊と解体です。物語を語りながら、私は、レクイエムをうたうがように映画をつくっています。

私の作品には、もろもろの矛盾から一挙に破局に至る瞬間が必ずあります。その時、主人公たちは、自分自身の意志的選択によるうと、周囲の状況によろうと、結局、自分自身と対決することになる。愛による関係や家族的な関係から救いの手が彼らにさしのべられようとならぬのべられまいと、また、権力や金の力でそうした救いの手があるとならうと、結局の状況は変わりません。彼らは孤独です。その時直面する状況をなにとつ変えよう望みもなく、いや、そういう望みをもつ希望すらもちえぬ程、徹底して孤独な局面に立たされる。

私のことをデカダン(頹廢主義者)という人がいます。デカダンスについては、私は、トーマス・マン同様、積極的な賛同者です。全身デカダンスに染まっているといつてよい。トーマス・マンはドイツ文化のなかで、私はイタリア文化のなかでデカダンです。私の一貫した関心は病的な社会的な検診なのですから。

【スタッフ】
監督……………ルキノ・ヴィスコンティ
脚本……………ルキノ・ヴィスコンティ、スーゾ・チェッキ・ダミーコ
……………エンリコ・メディオーリ
撮影……………パスカリーノ・デ・サンティス
音楽……………フランコ・マンニーノ
美術……………マリオ・ガルブリア
編集……………ルッジェーロ・マストロヤンニ
製作……………ジョヴァンニ・ベルトルッチ
【キャスト】
教授……………バート・ランカスター
ピアンカ・ブルモンティ……………シルヴァーナ・マンガノ
コラッド・ヒューベル……………ヘルムート・バーガー
リエッタ・ブルモンティ……………クラウディア・マルサーニ
ステファノ……………ステファノ・パトリツィ
エルミニア……………エルヴィラ・コルテーゼ
教授の妻……………クラウディア・カルディナーレ
教授の母……………ドミニク・サンダ
Rusconi Film (伊) / Gaumont International (仏) 合作1974年作品
＜サントラ盤＞セブンシーズ



●ストーリー「家族の肖像」と呼ばれる一連の絵画の収集を唯一のたのしみにして、ローマの中心地にある豪邸にとじこもっている教授。その静かな生活に、ある冬の日、不思議な家族の一群があらわらしく侵入する。ピアンカ・ブルモンティ夫人とその娘リエッタ、婚約者ステファノ、ピアンカの情夫らしい美青年コラッドの4人である。邸の二階の住人となった若者たちの存在は、教授には迷惑でしかないが、教授は、下品に振舞うコンラッドに意外に純粋な心を發見して、永い間、他者とのふれあいをかたくなに拒んできた自分の生き方に気づく。が、4人の「家族」たちは、わがままで、無道徳で、頹廢のかぎりをつくし続けて、教授とのトラブルはたえない。和解のために教授が4人を招いた晩餐の席―それは一幅の「家族の肖像」のようだった。決定的な破局の夜がおとずれる……。

〔テクニカラー、トッドAO、上映時間2時間1分〕

11月25日(土)より
エキブ・ド・シネマ5周年記念
79新春ロードショー

●地下鉄(都営6号線)神保町・下車1分 国電(中央線)水道橋駅またはお茶の水駅・下車7分 ●神保町交差点
岩波ホール (262) 5252

お得な労音特別鑑賞券 880円
(当日は一般・学生とも1,300円)
12月30日→1月2日は休館
上映時間
平日(月-土) 12:30 3:30 6:30
日・祝 11:30 2:30 5:30
上映時間
■入れ替え制・自由定員制
11月28日(火) 6:30の回のみ休映